



橋本省三先生を偲んで

石井 勝己

長年にわたり放射線医学の発展に寄与された橋本省三先生が本年（2015年）1月12日に逝去されました。昨年12月19日にたまたま受診されていた病院内で倒れ、直ちにICUに入院し、意識の回復が得られないままお亡くなりになりました。85歳でした。

先生は1953年に慶應義塾大学医学部を卒業され、国立東京第2病院（現 国立病院東京医療センター）にてインターンとして研修を受けられました。その時に放射科医長の山下久雄先生がアメリカ視察より持ち帰られた ^{131}I による甲状腺疾患の治療、 ^{32}P と ^{198}Au によるがん性腹膜炎の治療など活気に満ちたアイソトープの利用・研究をされているのに魅せられて、1954年に慶大放射線医学教室に入局したとのことでした。入局後は放射線治療・核医学を専攻し、診療・研究に励んでおられました。

1959年度IAEA給費留学生としてフランス国立Gustave-Roussy研究所のM. Tubiana教授の下に留学し、がん診療のシステムについて学び、殊に ^{192}Ir の組織内療法についてサクレーの原子力研究所とタイアップして線源加工も自在な使いやすいのを臨床利用し、帰国後も日本アイソトープ協会が試みに輸入したものを追試したりしたとのことでした。

1968年頃より北里大学に医学部新設の気運が始まり、放射線関係の設計を全面的に引き受けられて、地下1階に放射線関係諸施設を全て

収容し、1患者1フィルムジャケット永久保存としてカルテシステムと対応することにし、中央管理システムを確立しました。核医学では各部位のシンチグラムはハードコピーを依頼箇所にはレポートとともに送り、フォトスキャンは全部位のもを1ジャケットとして核医学に保存するシステムを作り上げたりと将来を見据えて核医学だけでも1,000 m²の施設を設けました。また、RI廃棄物の焼却処理に関しては、病院と研究室の19種類の放射性汚染物は日本アイソトープ協会で引き取っていただけましたが、動物屍体、臓器組織でアイソトープや病原微生物に汚染されている恐れのあるもの、引火性危険物（トルエン、キシレン）は、1975年前後に都市ガスバーナーで800度完全2段燃焼させて処理する方法を完成、稼働させるなど多くの実務的業績を残されました（本誌1996年8月号「私のRI履歴」参照）。

先生は豊富な知識に裏付けされた先見性を持たれ、将来を見越してのデータ処理装置（Infomatec社製、SIMS 3）をいち早く導入して核医学の進むべき方向を示されました。また、放射線部確立を目指して総ての画像にレポートを添付する努力をなさいました。放射線治療の時は、他科の先生とも話し合い最善の方法を行うなど北里大学放射線科に尽くされましたが、1976年に慶應義塾大学に教授として帰られました。

先生は日本医学放射線学会の理事として活躍されたのみでなく、ユーモアにも溢れ、学会の中で頭髪の少ない先生方を集めてBright Radiologistの会を作り会長となるなど人を楽しませるのも巧みな方でした。

先生にお会いするといつも種々な新しいことや弟子のことを考え、力一杯、元気に生きている姿を見て頼もしく、羨ましく思っておりますが、突然の訃報に接し茫然としております。

長い間のご指導とご鞭撻に感謝しつつ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌

（北里大学名誉教授）